

死なない政治家~転生した女の子は不幸に耐え抜きながらも、治安
最悪の街を何とかしたい

あいく

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ギャング、ドラッグ、汚職、自然災害。貧困に苦しみ、まっとうに生きることすら難しい最低の街。ある種の地獄と化したこの街にも、希望はあるのか。

目次

アシエリ	1
クソ家族	4
像	8

アシエリー

日の出の時刻。太陽が水平線から顔を出し、日光が辺りを照らす。暗闇によって、見えていなかった光景が太陽によって暴かれた。生まれた時から住んでいた我が家は、ボロボロになっていた。床は泥でまみれ、扉は蝶番を残して消失していた。

おぼつかない足取りで、家から出る。山の斜面に建てられた家はどれも泥にまみれていた。屋根のなくなった家もちらほらと見える。不自然に山肌が露出したところは、家ごと吹き飛ばされたことでできたものなのだろう。山のふもとでは、昨日まではなかった小さな湖が存在していた。

昨晚、大きな嵐が町を襲った。年々大きくなっていく嵐の中でも、一番大きな嵐だった。嵐は夜に私たちを襲い、街を破壊していった。巻き上げられた土や海水、木々が街中に落ち、家に突き刺さり、人を殺した。

唸るような暴風にかき消すことができないほどの、絶叫が一晩中鳴り響いていた。

おかしい、おかしい。なぜ、こんなに不幸な目に合うんだろう。私は、自分の半生を振り返りだした。

「あなたには、人生をやり直してもらいます」

真っ白な頭、マジックで描かれた立派な髭、全身タイトの変態。めっちゃやくちやイケボの変態が、急に話しかけてきた。

やばそうなおっさんなので、無視しようとしたが、勝手に口が開い

た。

「嫌です。そして、きもいです」

「え、本当ですか。ありがとうございます。では、人生をやり直していただきます」

「勝手に話をすすめないでください。そして、臭いです」

「詳細ですか？ もちろん説明させてもらいます。簡単に言いますと、あなたは死んでいます。そして、私たちは、特に意味はありませんがあなたにもう一度人生を過ごしてほしいのです。特に意味はありませんが」

「私死んでいるんですか？ いつ？ いつの間に？」

「今回のあなたの人生は、不慮の事故により老衰で死ぬことができませんでした。次回も、途中で死なれると、少々めんどくさいことが起きてしまいます」

「あれ……？ 私って生きてたの？ 何も思い出せない」

「そこで、あなたが絶対に途中で死ぬことがないように、多少のマジナイをかけました。人には過ぎた、不可思議なマジナイを」

「あれ、あれええ。私って、私？ 私って何？」

「ご安心ください。これで次回は老衰で死ねますよ。私たちも、たまにはいいことをしますね（ほっこり）」

「なんで体がないの？ 腕は？ 眼は？ なんで喋れ」

「それでは、生まれなおしていただきますでしょうか。心の準備はよろしいですか？」

「……」

「ああ、言い忘れていました。先ほども言った通り、あなたにかけられたマジナイは人に過ぎた代物です。その代償にあなたの記憶は消失しています」

「そして、死を自覚するのはやめておいたほうがよろしいですよ？」

「追いついてきてしまうので」

「心の準備ができた、って感じですかね？ よくわかんないですけど。じゃあ、転生させていただきますね」

クソ家族

眼を開けると、知らない顔があった。

「おはよう、アシユリー。お目目パツチリ開かせて、いったいどうしたの？」

「なんでもない！ まぶたかっぴらいてみただけ！」

「かっぴらいたなんて言葉、どこで知ったのかしら。賢いのね」

「パパがおさかなシバイてるところみてたら、うかんできたの！」

「シバくって言葉は？」

「いえからそとみてたら、オトコノコがボコられてたのみてたら、うかんできたの！」

「・・・あなたはとつてもかわいいし、かしこいけれど。汚い言葉をあんまり覚えるのは感心しないわね」

「あ、あははは。おしっこー」

「水は流すのよー！」

あたりをきよろきよろと見まわして、トイレに入る。腰を下ろして、ため息を吐いた。ああ、あぶない。ばれるところだった。私が、普通の子とは違うんだって。

生まれなおしてから、六年が経過した。大変だったなあ、この六年間。私が生まれなおしたこの国は、発展が遅れている国だった。水も水道から出る、電気もコンセントから出る。だが、安全がない。産業が進んでいない。警察は、地元のマフィアと仲良く共存する。国民の大半は、農業や産業で職を持つ。私の知識にあるような、大学に通っている人や、会社に勤める人は非常に少ない。

パアン！ 銃声。思考から意識が浮かび上がる。まただ、最近銃声が多い。どうやら、ギャングの抗争が起こっているらしい。

「大丈夫かー、アシエリー。ちびつてないよな！」

「しね！ くそあにき！」

「せっかく心配してやってんのになー。やっぱかわいくねえな、お前」

「はやくドアからはなれろ！」

「音聞かれるの恥ずかしいのか？ 別にどうでもいいだろ」

「バーカ！ バカにはわかんないんだよ！」

「六歳にバカって言われちゃあおしまいだな」

ゲラゲラ笑いながら、遠ざかっていたのが、くそ兄、サンゴ。私より十歳上のろくでなし野郎。彼女に振られたからって私で憂さ晴らししてくる、ノミみたいに器の小さい男だ。私は、前生きていた年を覚えていないが、絶対あいつより精神年齢は上だと思う。幼稚すぎる、馬鹿ガキ。絶対私のほうが大人。

「大きい声が聞こえたけど、大丈夫だった？」

「メイズおねえちゃん！ きいてよ！ あのバカあにきがき！」

「あららら、大変だったね。サンゴには、デリカシーつてもものがないからね。恥って概念もないわ、だって、あの子のやってきたことすべて恥なんだから」

「いや、そこまではおもわないけど」

「やられたら徹底的にやり返すのよ。甘いわ、アシエリー。大体あなたね」

どういいうわけかくどくと説教し始めたのが、メイズお姉ちゃん。外見はおしとやかに見えるけど、中身は口の悪いお局おばさんである。バカとおなじ年で、口調はあまり強くないが、バカみたいに気が強い。だけど、頼りになるお姉ちゃん。

なぜか泣くまでこっぴどく叱られた私は、勝手にトイレの扉をあけられて、メイズお姉ちゃんに優しく抱きしめられた。お姉ちゃん：DVとか上手そうだね……。

「ごめんね、最近イライラしちゃって……。ほら、彼氏に振られちゃって……」

お前もかい！ と、泣かされた相手に言えるはずもなく、自分史上最高の笑顔で許した。

「うわ、何その顔。ピエロの真似するにはハロウィンまで遠いわよ」

「そうだよねー。とおいねー」

「アシエリー、ピエロの格好して、曲芸しながら物乞いしてみたら？

これってたぶん天性の才能だわ。絶対に儲かるわよ」

「だま、だますようであるいからいいー」

「そうなの、残念。じゃあ、もうすぐご飯ができるから、早くリビングに来るのよ。なくなっちゃうかもしれないから、早めにね」

メイジお姉ちゃんとサンゴは双子だ。鈍感なところが似てるのも当然だ。おちつけ、わたし。ビークール。カラカラと無心でトイレツトペーパーを引っ張り、鶴を折った。

エへへへ。鶴を眺めて癒され、意気揚々とリビングに向かった私は、空の皿を見つけた。

「弱肉強食さ。姉さん。意味は分からないけど」

「ごめんね、アシエリー。ベスったら、あなたのお皿を一番に狙って……」

「遅いのが悪い。疾風迅雷さ、たぶん！」

「お姉ちゃん、アシユリーの分守りだったけど。やっぱり、忠告したのになでこないアシユリーの自業自得かなって」

「メイズ姉ちゃんを、申し訳なさそうにさせた罪は大きいぞ！ 姉さん！ 謝るんだな！ メイズ姉ちゃんと、ついでに僕に！」
「ちびっこ、俺のでよければやるぞ」

うちの家族、クズしかないわ。

像

「いってらっしゃーい」

仕事のために、パパやママ、他の兄弟たちが家を出る。十二歳以下の私たちは、仕事はまだできないので、家でお留守番だ。

「ごめんて姉さん、ほんとう、この通り」

「ベス、もつと頭下げんさい」

「いいよ、ミザリーねえちゃん。ありがとう」

家に取り残された私たち三人。ミザリーお姉ちゃん、愚弟、そして私。私たちは、部屋の掃除をしたり、食器を片づけたり、子供ながらできる家事をこなしていた。

「ベスー、その雑巾つかって床拭いといてー」

「えー」

「アシユリー、像磨いといてー」

「わかったー」

「僕が磨くの変わろうか？」

「あんたは黙って床磨きんさい」

「ちえー、楽でいいなあ。姉さん」

「ざまあないわね」

真っ白な布を手に取り、リビングにおいてある大きな机の下へもぐりこむ。

「あ、パールわすれちゃった」

「ほら、姉さん」

かがんだベスの手には、パールが握られていた。

「いいタイミングね」

「しつかりしてよ。五歳だぞ、僕。なんで僕が姉さんをたすけてるのさ」

「そんなこというなら、ワタシだってナナサイよ」

呆れたベスの顔を尻目に、手探りでくぼみを探す。数分し、ようやく見つかったくぼみを、パールとテコの原理を用いて、開けようとする。

「姉さん。机動かさないと開けられないよ」

「……うるさいわね。しつてたわ、そのぐらい」

「三度目はあるかな。二度あることは、つていうし」

「うるさい、ばーか！ ガキのくせにナマイキってんじやないわ!!」

「ミザリーねえちゃん！ こっちきてー!」

「どうしたの？ 大きな声なんか出して」

「つくえどけるのでつだつて！ そっちはこのガキがもつから!」

「はあ、子供だなあ。姉さんは」

「いま洗い物の途中なのにねえ」

大きな机を、脚を引きずりながら動かすと、巧妙に隠された地下室の扉が現れる。パールを使うと、地下室の扉は開いた。コンクリートで作られた階段が現れた。

「はい、懐中電灯。忘れてたでしょ」

「三度目だね」

「さつさとどつかいてー!」

二人を無理やりリビングから追い出し、地下室に続く階段を下つていく。

「やっぱりさむいわね」

さきほどまで、うだるような暑さが続いていたが、今は肌寒く感じる。階段は緩やかだが、湿っている。

「1, 2, 3, 4」

「9, 10, 11, 12, 13」

「19, 20, 21, 22」

「38, 39, 40, 41」

「58, 59, 60, 61, 62」

「81, 82, 83, 84, 85」

「123, 124, 125, 126」

「ながい」

すでに階段を下りた数は百を超えた。いまだに地下室にはつかない。

「つかないな、かいちゅうでんとう。いつもどうりだけど」

真つ暗闇の中、壁に手を伝いながら下っていく。何か足元を通る。何か私の後ろにいる。何か私の足にしがみついている。

「あー、おもた」

それから、何百段と下った。手に持っていた懐中電灯はなくなっていて、顔の真横に何かがあった。足元からは、軋んだ音が聞こえてくる。

「ついた」

何かは消え去った。おそらく地下室についたのだろう。なにも見えない。前後左右どちらがどの向きかわからない。前に足を踏み出

すと、ガラスを踏んだ音がした。

「あれ、いつのまにおとしたっけ」

ガラスの正体は布に張られた氷だった。おそらく私がなくした白い布だろう。凍えるような寒さによって、濡れた布は凍り付いたのだ。

「よし、ふうう」

さらに寒い方向へと進むと、何かにぶつかつた。おそらく像だろう。なにもかも凍りつく空間で、像はいつも濡れている。白い布で濡れをふき取っていく。拭き切ると、いつのまにか地下室の扉の外にいる。

「あら、早いわね。もう終わったの?」

「せっかく扉閉めて出れなくしてやろうと思ったのに」

「ベースー? 床磨きに加えて廊下磨きたい?」

「玉石混合つてやつだね。知らないけど」

「覚えた言葉を使ったがるのは、悪いことではないけど、もう少しちゃんと使いなさい」

「五感で言ってるからいいの。僕将来ラッパーになりたいからこれでもいいよ」

「浅はかね」

「あれ、姉さん。懐中電灯とか布は?」

「……」

「忘れたの? 四度目じゃん」

「……」

「いいわ、私がつてくる。アシユリーはゆっくり休んでおいで」

「そんなことする必要は……。うん、姉さん。寝たほうがいいよ。なんてひどい顔」

「ベス、一緒について行ってあげて」
「うん……」

ベスが私の手を引っ張ってベットまで連れていく。途中に鏡があった。鏡に映る私の顔は、いつかの誰かの死に顔のようだった。